

# 不活化ポリオワクチン接種について

## 1. ポリオ(急性灰白髄炎、いわゆる「小児まひ」)について ~現在の日本では流行していません~

- ・ポリオウイルスによって起こる感染症です。まひが起こると、主に足の筋力低下や筋肉萎縮が後遺症として一生残ります。
- ・日本では1981年から30年以上、野生のポリオウイルスによるポリオ患者の報告はありません。世界では、パキスタン、アフガニスタン、インド、ナイジェリアが流行国であり、近隣の国々(タジキスタン、コンゴ、アンゴラ、セネガル、ロシアなど)では流行が起こっています。これらの国々から日本に野生のポリオウイルスが持ち込まれる危険性はゼロではありません。

## 2. ポリオワクチンについて ~経口生ワクチンと不活化ワクチンの二種類があります~

### 経口生ポリオワクチン(OPV)の利点と問題点:

<利点>①定期接種のため、公費負担(無料)で接種できる。

②経口投与のため注射に伴う痛みや副反応(発赤、腫脹など)がない。

③万一、接種で重い健康被害が生じた場合、国が認定すれば、予防接種法に基づき「予防接種健康被害救済制度」により各種補償がうけられる。

<問題点>①ポリオ生ワクチンを服用すると本人または家族を含め周囲の人にポリオウイルスが感染する**ワクチン関連麻痺**の危険がある。この感染で発症した場合、野生株と同等の後遺症を残す可能性があり治療法はなく、欧米等先進国ではこの副反応のない不活化ワクチンが主流となっている。

②ワクチン関連麻痺が疑われながら国の認定が得られず補償を受けられない症例がある。

### 不活化ポリオワクチン(IPV)の利点と問題点:

<利点>①ワクチンの効果は非常に高く、十分に抗体を上昇させ、またウイルスの排泄がないのでワクチン関連の麻痺や流行はない。

<問題点>①定期接種でないので接種は有料となる。(当院では1回4500円)

②外国では普通に使われているワクチンだが、日本で承認されていないので、万が一、重い健康被害が生じた場合は、予防接種法(定期接種)や独立行政医薬品医療機器総合機構法(任意接種)に基づく給付はうけることができず、その際は輸入業者による輸入ワクチン副作用被害救済制度による補償となる。

③副反応としては、接種部位の発赤、腫脹などで他の不活化ワクチンと変わらない。

## 3. 不活化ポリオワクチンの接種方法

### ●●経口生ワクチンをまだ接種していない児は？

◇不活化ポリオ4回接種法:1回目:生後2ヶ月以降の任意の時期 2回目:1回目の8週間後 3回目:2回目の6~12ヶ月後。4回目:4~6歳

◇不活化ポリオ2回+経口生ポリオワクチン2回接種法:生後2ヶ月以降に不活化ポリオワクチンを8週間隔で2回接種。その6ヶ月後経口生ポリオワクチン1回目。4~6歳で経口生ポリオワクチン2回目

\*不活化ポリオ2回+経口生ポリオ2回という方法は、アメリカで経口生ポリオから不活化ポリオへの切り替え時期(に行われていた方法。この方式の利点は、支払金額が少なくて済む、児がポリオに感染することは考えにくい(ある程度抵抗力を付けてから生ワクチンを服用するため)ことがあげられます。しかし欠点としては、生ワクチンをのんだ後に家族や他の児に対する感染力がある可能性は残ります。

### ●●経口生ポリオワクチンをすでに1回接種している児は？ 不活化ポリオを3回接種。

または不活化ポリオを2回接種して、そのあとに経口ポリオ。

●●経口生ポリオワクチンを2回接種済みの児は？ 日本で生活するには、不活化ポリオワクチンの追加は不要ですが、世界の標準である4回接種を希望する場合は、不活化ポリオワクチン2回接種

●●昭和50-52年生まれのご両親 不活化ポリオの2回接種

## 4. 不活化ポリオワクチンの副作用

軽い副反応:接種部位が赤くなる、はれる。発熱があるなど。これらの症状は通常数日で自然に軽快します。

まれな重い副反応:非常にまれに、ショック、アナフィラキシー反応を起こす可能性があります。